

ふれあいの赤いエプロンプロジェクトは、 東北に何をもたらしたのか？

福島、当事者視点からの評価 ：第三者評価による報告2

久地井寿哉¹⁾ 木下ゆり¹⁾²⁾ 黒田藍¹⁾³⁾ 伊東尚美¹⁾⁴⁾

佐藤香菜子¹⁾⁵⁾ 石井なつみ⁶⁾ 福田吉治¹⁾³⁾

1) ふれあいの赤いエプロンプロジェクト評価チーム

2) 東北生活文化大学短期大学部

3) 帝京大学大学院公衆衛生学研究科

4) 福島県立医科大学医学部

5) 中京学院大学短期大学部

6) 医療法人かしの木内科クリニック

演題発表に関連し、開示すべきCOI関係にある企業は以下のとおり
です。

木下ゆり・福田吉治 過去1年間を通じて
<受託研究> 公益財団法人味の素ファンデーション

背景

- ふれあいの赤いエプロンプロジェクトは、2011年の東日本大震災後、被災者の食生活の改善とコミュニティの再生・活性化を目的とした、参加型料理教室を通じた復興支援である。
- 味の素グループ・公益財団法人味の素ファンデーション(TAF)と東北3県(岩手・宮城・福島)の行政や住民組織等(パートナー団体)と協働で行われてきた。

目的

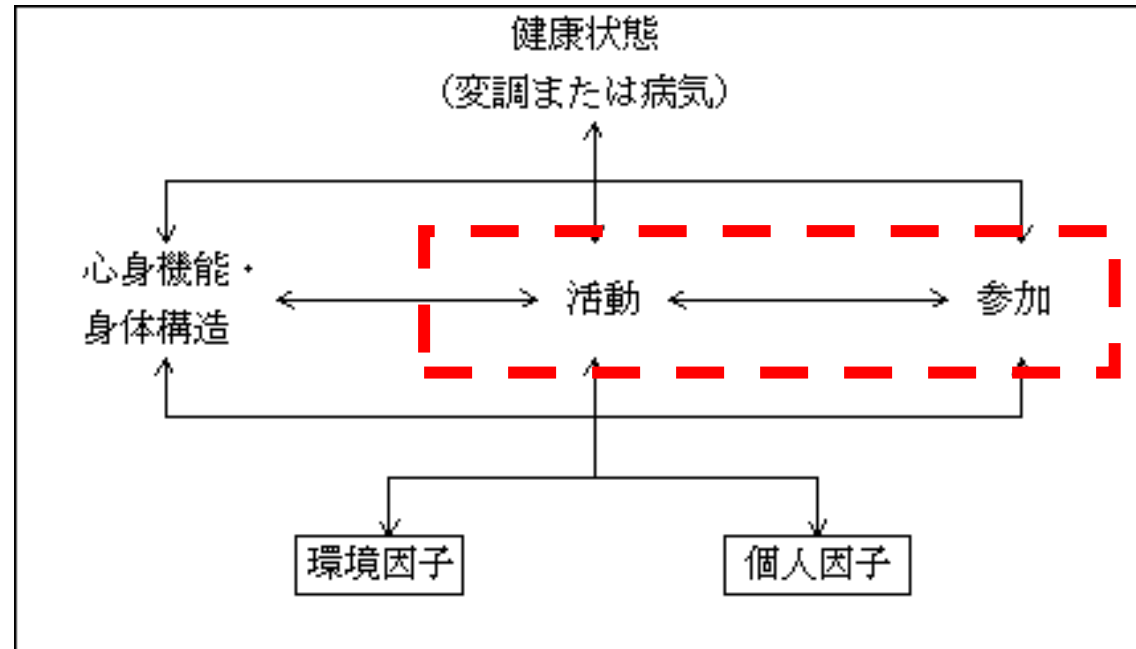
本プロジェクトによる参加型料理教室の体験は、被災者の生活の質を高めることに役立つことが示唆されている。

- そこで
- 本プロジェクトの福島県の被災者の参加・活動経験とその意味を明らかにする。

方法

- 半構造化インタビューの実施
- 原発事故による避難住民を対象とした
復興公営住宅団地の自治会長 5 名を分析対象
 1. 双樹会 A氏(双葉)
 2. 郡山守山駅西 B氏(浪江)
 3. 会津若松 C氏(大熊)
 4. 本宮市榊形団地 D氏(浪江)
 5. 下神白団地 E氏(富岡)
- インタビューガイドに基づきテーマ分析(帰納的・記述的方法)を行った。
- 分析枠組みとして、ICF(国際生活機能分類)の理論を参考に分析を行った。

ICF (国際生活機能分類、WHO、2002)



活動制限(activity limitations)

・・・個人が活動を行う際の困難さ

参加制約(participation restrictions)

・・・個人が生活・人生場面に関わる際に経験する問題

ICFフレームワークに基づく インタビューテーマ

- インタビューガイドに基づき以下のテーマ分析を行った。
- 「活動性」・・・実際の活動に基づく“生の声”
 - 印象に残っている参加者の声
- 「参加性」・・・参加機会、参加動機、参加阻害要因・促進要因
 - プロジェクトをどこから知ったか？
 - プロジェクトに参加しようと思ったのはなぜか？
 - プロジェクト参加して良かったことは？
 - プロジェクトに参加するにあたり、どのように苦労したり困ったりしたか？

結果：参加機会、参加動機について

1. 参加機会・・・どこから知ったか？

- 保健師、社会福祉協議会、みんぷく等

2. 参加動機

○参加者が喜ぶから

食べ物の交流会って一番喜ばれるんですよ。大変なんだけど、一番喜んでやりました。(自治会長、市営住宅、浪江町から避難)

○安心してできるし、気軽にできるから

○みんなで集まれる

団地ごとの集まりが少なかったので、料理を通じて集まれたらと思った(自治会長、復興団地、大熊町から避難)

○みんなで作るたのしさ、みんなで食べるおいしさ

○料理のレパートリーが増える

×企業の宣伝 ×衛生上怖いこと←活動阻害要因

参加経験（抜粋）

（印象に残っている参加者の声、出来事）

- メニューが違う、指導も違うもんなあ。怖かったけど、だんだん顔見ているうちに、みんなに正しく教えているってということが分かってきた。（中略）ざっくばらんにいっちゃうけど、Iさんは厳しいけど、でも温かみがあるから、嫌ではなかった。
- 一人の人、今日も来てたけど、いわきから（白川に）来てるんだね。あっちに土地を買ったから、あっちの自治会に入るより今までいたところが慣れちゃったから、わざわざくるのよ2時間かけて。あと郡山の人もおおいです。
- （参加者から）またやりたいね、とか（言われたこと）
- 自分は作ってくれる妻がいるが、（男性の）単身の方は「こういったものを作ってみよう」と参考になっているのでは。
- コミュニケーションづくりのツールになっている。情報交換や、長く付き合える人ができる場になっている。
- なによりも、近くで話し合いができるというのがよかった。普段はほとんど話さないから、地元住民ともその場で交流でき、知り合いになった。

結果：活動の特徴として 4要因が抽出された

要素	背景・内容
みんなで食べる、楽しい、おいしい、安心できるという生活感覚の再発見	住民の参加動機になる 参加者の満足度が高い
参加者が声掛けに応じて集まってくる（社会的凝集性）	住民の社会参加機会になる 声かけにより住民が集まってくる
保健師・社協・みんぷく等、キーパーソンの存在	参加機会の提供 イベントの企画・運営・実施 他地域への活動の推奨
震災の被災者に寄り添ったレシピの価値（寄り添う＝共感する）	コミュニケーションづくりのツール になっている。 料理のレパートリーが増える

考察(1)実践からの示唆

- 参加促進要因としては、本プロジェクトが、(1)被地域活動の参加機会の創出につながっていること、(2)震災によって孤立していた被災者のつながりが回復したこと、すなわち社会的凝集性を促していることが示唆された。
- 一方で、参加の前段階で何らかの事情により参加できない者がいることの言及もあった(分析外)

考察(2)実践からの示唆

- 活動促進要因としては、本プロジェクトが、食にかかわる3つの安全性が確保されたこと、

すなわち、

- (1) 孤立化予防や心理的安全の場の確保
 - (2) 衛生面での配慮
 - (3) 被災者相互かつ支援者の“よりそい”や“温かさ”を感じることで顔の見える場づくりが行われたこと、
- が示唆された。